

俳句が青春時代と今をつないでくれました

「『桜』の句は、先人がすばらしい句をたくさん残されているので、作品にするのはむずかしいと思っていました。それでも石割桜と向かい合ったときこみ上げてきた思いを、どうしても句にしておきたかった」と話す角田輝康さん。『平成15年度NHK全国俳句大会』で大賞を受賞した作品は、『石割つて 豊穡として 桜かな 青春時代を過ごした盛岡市(岩手県)の石割桜と40数年を経て、再会した思いを句にしました。

「表彰式(1月18日開催)で、NHKホールの舞台にあがったときは緊張しました。まさか、大賞とは、夢のよう。俳句が遠い青春時代と今をつないでくれました。俳句との出会いに感謝しています」

「物見高い性格なんです、僕は何にでも手を出し、すぐに夢中になる。短歌や川柳もつくっているんですよ。だから、退職してからも、いきいきとしています」と笑顔で話す角田さんが俳句を始めたのは7年ほど前から。NHK学園の『俳句友の会』(通信講座)に入会するとともに、『NHK俳



壇』(NHK出版)や北海道新聞『日曜文芸』欄の俳句部門などに句を投稿しながら、俳句を勉強してきました。

「俳句は、わずか17文字の文芸です。推敲するときは、徹底して無駄を削ることに心掛けています。そして、17文字から想像することを読者に託します。感動を分かち合える読み手との出会いは、句の生き死にかかわるとても大切なことなんです。この度の大賞も感動を共にできる選者との出会いに恵まれました」

外出するときはいつも手帳を携帯し、感動を書き留めているという角田さん。ペンを走らせるその眼差しの向こうには、想像力豊かでなくては見えない、すてきな景色が広がっているようです。



KIRARI

かく た てる やす
角田輝康さん(若草町)

『平成15年度NHK全国俳句大会』(NHK、NHK学園主催)で、角田輝康さんの作品が、全国から寄せられた約4万9千の中から、最高賞の大賞に選ばれました。

角田さんに受賞の喜びや俳句への思いなどを聞きました。

感動を分かち合える
読み手との出会いが
うれしい



昭和3年、広尾郡広尾町生まれ。76歳。
盛岡工業専門学校(現在の岩手大学)を卒業後、北海道電波管理局に勤務。昭和25年から高校の教員となり、室蘭工業高校を最後に昭和63年3月に定年退職。